

『歯界展望』 2005 年 6 月号・特別企画「健康づくりの“専門家”を目指して」に読者から寄せられたご意見・ご感想をもとに

辻 晶生（医歯薬出版・月刊「歯界展望」編集部）

『歯界展望』 2005 年 6 月号に、NPO 法人ウェルビーイングの先生方に「健康づくりの“専門家”を目指して—生活の場に広がる歯科医の役割—」のタイトルにて特別企画をおまとめいただきました。

企画の発端となったのは、2003 年秋に東京にて開催されたウェルビーイング設立 30 周年記念のシンポジウムです。シンポジウムを取材させていただくなかで、社会に広く目を向け、歯科医の役割とは何かを真剣に考え、それを踏まえて目標を立て、行動・実践するという先生方のご姿勢に深く感銘を受けました。“歯科関係者の意識改革”がシンポジウムの大きなテーマの一つでしたが、雑誌の企画を通して、先生方の取り組みやその思いを大勢の読者の方に伝えたいという思いを強くもちました。そして、中村譲治先生、筒井昭仁先生をはじめ、大勢の先生方のご尽力の下、特別企画として形を結び、30 年以上にわたる歯科保健・医療活動におけるさまざまなフィールドで展開された健康づくり支援の専門家としての取り組みを誌面にてご紹介いただきました。

ここでは、今回の企画に寄せられた読者の方々からのご意見・ご感想について、雑感を交えつつご報告したいと思います。

いただいた感想の多くは、“歯科医の仕事”の範囲に関するものでした。多くの先生方は、日々の臨床のなかで、生活の場の視点から疾病や健康をとらえることの重要性や、それを応用したアプローチでなければ解決できない問題が多く存在していることを実感されていることと思います。しかし、ウェルビーイングの先生方が実践されているように、それを実際に行動に移すことを阻んでいるものは、従来の教育や固定観念によって形作られてきた“歯科医の仕事”という固定された枠組だと思われます。「特別企画を読んで、今まで自分が歯科医の仕事だと考えてきた範囲があまりに狭すぎたということを感じた」

「社会生活のなかに問題が多く存在していることは承知していたが、それを解決することが自分の仕事だとは思っておらず、あきらめていた」という内容のご意見をいくつもいただきましたが、今回の企画のなかで、従来の狭く限定された“歯科医の仕事”の枠組みを大きく超える歯科保健活動を実践している人々がいるということを示せたことは、そういった読者の方々を勇気づける意味で非常に有意義であったのではないかと思います

また、今回の企画のなかで示されていた「時代の流れ、社会の変化に伴って、歯科医の役割は変化していく」という考え方についても、大きな反響がありました。「30 年間活動を続けてこられたからこそ、という視点が随所に溢れていて、とても参考になりました」というご感想をお寄せいただいた読者の方は、「社会に必要とされる歯科医の役割とはどんなものなのかを考え、自分自身の存在意義を問い直す必要を強く感じました」と結ばれています。“専門家としての位置づけを再確立する”という今回の企画の主旨が、このように大勢の読者の方々に伝わることを願っています。

また、実際に一步踏み出してみたいと思われた読者から、「方法論についての解説がもっと読みたい」「実際の理論や技術についてぜひ学びたい」というご意見が多数寄せられ

ました。コミュニケーション、行動科学について、文章で誰にもわかりやすく伝えていくことは困難を伴いますが、今後の企画の課題として取り組んでいければと思います。さらに、これらのことをともに学んだり、活動を推進していくための仲間づくりについても多くの関心が寄せられていることがわかりました。30周年記念シンポジウムの分科会の中でも、「仲間づくりから組織づくり」がテーマの一つとして掲げられていましたが、志を一つにした方々がその力を結集できるよう、雑誌メディアとしても情報を提供していく必要があると感じます。

最後になりますが、今回の企画に対し、知人の先生から「こういった活動を読者に紹介していくことが、出版社の使命だ」という嬉しいお言葉をいただきました。この企画を編集者として担当させていただくにあたり、自分自身の仕事やその社会的な役割についても深く考えさせられました。また、何かの機会に、志を一つにして一緒にお仕事をさせていただければと願っております。ウェルビーイングの先生方の今後ますますのご活躍を楽しみにしております。